

〈顕句論・目次〉

第1章

本論 1

著述の意味 1

縁起生は極辺から離れると説かれた面から、教示者を賞賛する 1

総義 1

この言葉の意味に論書の著述内容等が含まれるさま 1

差別事（主体）において八の差別法（特質）が具わるさま 2

それに対する他派の反論を斥ける 6

「滅」等の数と順序に対する反論を斥ける 6

縁起生は八つの極辺と離れると説明する方法 8

章の著述それぞれの意味を説く 8

縁起生は本性として空であると示す 8

本義 8

二無我を要約して示す 8

因果の行為と行為するものを考察して法に本性を否定する 8

章の著述を説く 8

結果に生の本性を否定する 8

四極辺の生を否定する 8

生を否定する宗（主張命題） 8

本義 8

派生した義 8

絶対的否定・定立的否定の何れが理由の主張命題であるかを思惟する 8

絶対的否定が宗（主張命題）であると示す 8

生を否定する正理 8

自生を否定する正理 8

自派を設立する 8

それへ対して他派からの過失の述べ方 9

その過失が自派には無い理由を説く 9

他生等を否定する正理 22

三極辺の生を否定する 22

四極辺を否定して成立した意味を反駁と共に示す 24

他生の否定に経証が矛盾するという反論を斥ける 47

経証と矛盾するという反論を挙げる 47

経証との矛盾を斥ける 48

生じさせるものに縁の本性を否定する 48

縁の本性を共通に否定する 48

II

- 行為するものの面から縁であると分別することを否定する 48
 - 生じる行為を成させる理由によって縁であると分別することを否定する 48
 - 果が生じる理由によって縁であると分別することを否定する 51
 - 行為対象の面から縁であると分別することを否定する 51
- それぞれに否定する 52
 - 因縁の定義を否定する 52
 - 所縁縁の定義を否定する 53
 - 等無間縁の定義を否定する 54
 - 増上縁の定義を否定する 55
- 共通に否定する別の方法を示す 55
 - 結果が起こる理由によって縁に本性が有ることを否定する 55
 - 結果が縁である・なしの本性として成立したことを否定する 56
 - 縁と縁でないものの確定した本性を否定する 57
- 了義の教証と合わせる 58
- 章の名を示す 58

第2章

- 行き来の行為と行為するものを考察して人（プトガラ）に本性を否定する 59
 - 章の著述を説く 59
 - 詳細に説く 59
 - 業と行為者において、行為をそれぞれに否定する 59
 - 業を考察して否定する 59
 - 三つの道において共通に行為を否定する 59
 - 「歩く」において行為を特別に否定する 60
 - 対論者を置く 60
 - それを否定する正理 61
 - 対象を表す言葉と行為を表す言葉において、一方に意味があればもう一方に意味が欠如する 61
 - 双方に意味があれば、途方もない背理となる 62
- 行為者を考察して否定する 63
 - 行く者が行く（行為）の拠所として有ることを否定する 63
 - 三種の人において、行く（行為）を一般的に否定する 64
 - 行く者に行く行為を個別に否定する 65
- 行為が有る理由を否定する 66
 - 最初の始まりが有ることを否定する 66
 - 行く所である道が有ることを否定する 67
 - 行く（行為の）対処が有ることを否定する 68
 - 最後の止まることを否定する 69
 - 留まる理由を否定する 70

行為を考察して否定する	72
「行く者」と「行く（行為）」において、同一か別かと考察して否定する	72
「行く者」とする行為に、第二の行為の有無を考察して否定する	73
業と行為者において、行為を共通に否定する	74
まとめ	75
了義の教証と合わせる	75
章の名を示す	77

第3章

二無我を詳細に説く	78
法とプトガラをそれぞれに分けて説く	78
法の無我を説く	78
三法（現象）の無我を説く	78
處（六根六境）に法我を否定する	78
章の著述を説く	78
対論者を置く	78
それを批判する	78
「視る」の三法（現象）が本性として成立することを否定する	78
視る行為者を否定する	78
眼が視る行為者であることを否定する	78
自らを視ないという理由によって否定する	78
理由を挙げる	78
不確定因を斥ける	79
意味を要約する	80
視る行為と関係する・しないを考察して否定する	80
我か識が視る行為者であることを否定する	81
視る行為対象と行為を否定する	83
その正理を他にも適用する	84
了義の教証と合わせる	85
章の名を示す	85

第4章

蘊に法我を否定する	86
章の著述を説く	86
色蘊が本性として有ることを否定する	86
他の意味として有るものに因果を否定する	86
有無と似不似に因果を否定する	87
その正理を他に適用する	89
論争や説明する際に、返答をする仕方	89
了義の教証と合わせる	90

章の名を示す 91

第5章

界（元素）に法我を否定する 92

章の著述を説く 92

六元素が本性として成立したことを否定する 92

虚空の元素が本性として成立したことを否定する 92

虚空の元素において性相と名相を否定する 92

事相を否定する 92

性相が当てはまることを否定する 92

前後を考察して性相が当てはまることを否定する 92

性相の有無を考察して性相が当てはまることを否定する 93

それによって事相を否定したと示す 94

性相を否定する 94

まとめ 94

事物として・無事物として成立することを否定する 94

本義 95

反論を斥ける 96

諸批判のまとめ 97

その正理を残りの元素へも適用する 97

有無の辺見を叱責する 97

了義の教証と合わせる 98

章の名を示す 98

第6章

それに我が有る理由を否定する 99

依拠するものである全くの煩惱が有ることを否定する 99

章の著述を説く 99

貪欲と欲す者が本性として有ることを否定する 99

前後して起こることを否定する 99

貪欲の以前に欲す者の有無を否定する 99

欲す者の以前に貪欲の有無を否定する 99

一緒（同時）に起こることを否定する 100

相互関係が無いので、一緒であることを否定する 101

同一と別において、一緒であることを否定する 101

同一と別において、一緒であることを一般的に否定する 101

別において、一緒であることを特別に否定する 102

別として成立していないので、一緒は成立しない 102

別として成立したならば、一緒は必要性が無い 102

別が「一緒」に対応するならば、相互依存すると示す 103

諸批判のまとめ	104
その正理を他にも適用する	104
了義の教証と合わせる	104
章の名を示す	105

第7章

性相（定義）である生壊住が有ることを否定する	106
章の著述を説く	106
対論を述べる	106
それを批判する	106
有為の定義が本性として成立したことを否定する	106
総体の定義を否定する	106
三定義を共通に否定する	106
有為である・ないと考察して否定する	106
それぞれか集合の何れであるか考察して否定する	107
他の定義が有る・無いと考察して否定する	108
背理を挙げる	108
論駁の返答を否定する	108
第一の背理の論駁を否定する	108
論駁を述べる	108
それを否定する	109
第二の背理の論駁を否定する	111
論駁を述べる	111
それを否定する	111
例を否定する	111
主張命題に批判を述べて否定する	111
理由が定かではない（不定因である）と示して否定する	113
本義を示す	113
前述の典拠を挙げる	114
意味を否定する	115
それぞれに否定する	115
生が本性として成立したことを否定する	115
生じさせられるものを、三時制で分析して否定する	115
共通、個別に生を否定する	115
三時制の生を共通に否定する	115
「生じつつある」を個別に否定する	116
否定への反論を斥ける	116
三時制の「生」を否定したことに対する反論を斥ける	116
「生じつつある」に「生」を否定したことに対する反論を斥ける	118

「生じつつある」を承認しても否定する	119
有無等の三つを分析して否定する	120
滅しつつある・ないの二つを分析して否定する	120
住が本性として成立したことを否定する	121
行為について三時制を分析して否定する	121
「滅しつつある」である・ないと分析して否定する	122
他の「住させるもの」の有無を分析して否定する	122
壊が本性として成立したことを否定する	123
「滅」を分析して否定する方法	123
三時制を考察して否定する	123
住である・ないと考察して否定する	124
その時点・他時点を考察して否定する	125
本義	125
反論を斥ける	125
事物の有無を考察して否定する	126
他である「壊すもの」の有無を考察して否定する	127
その過失が自派には不等である理由	128
「壊」を無因とする主張を否定する	129
個別の定義を否定する	130
それによって、無為が本性として成立したことも否定したと示す	130
そのように否定したことにおいて、経証との矛盾を斥ける	131
了義の教証と合わせる	131
章の名を示す	132

第8章

因である業（行為）と行為者が有ることを否定する	133
章の著述を説く	133
業（行為）と行為者が自性として成立したことを否定する	133
一致する方向の行為と行為者が自性として成立したことを否定する	133
始めの二分類の行為と行為者を否定する	133
主張命題を置く	133
理由を示す	134
第一命題の理由	134
誰も為していない業が有るという背理で否定する	134
何も為さないことに行為者が有るという背理で否定する	134
第二命題の理由	135
無因となる背理によって否定する	135
それを主張することに過失を述べる	135
第三分類の行為と行為者を否定する	137

- 不一致の方向の行為と行為者が自性として成立したことを否定する 138
- それぞれの行為者が、方向の違うそれぞれの業（行為）を為すことを否定する 138
- 方向の違う業（行為）を二つずつ為すことを否定する 138
- 世俗名称として業と行為者を設ける方法 141
- その正理を他に適用する 142
- 了義の教証と合わせる 143
- 章の名を示す 143

第9章

- プトガラ（人）の無我を説く 144
- プトガラ（人）が本性として成立したことを否定する 144
- 章の著述を説く 144
- 対論を述べる 144
- それを批判する 144
- 近取者が自性として有ることを否定する 144
- 他派が考察した我を否定する 144
- 取る者が、取られる対象一切の以前に有ることを否定する 144
- 取られる対象より前であれば、「取者」と名付ける因（理由）が無いことで否定する 144
- 取る者が前であれば、取られる対象に留まる拠所が無いことで否定する 145
- 取られる対象それぞれの以前に有ることを否定する 146
- 対論を述べる 146
- それを批判する 146
- 取られる対象一切の以前に有る理由を否定する 148
- それによって近く取られる対象も本質として有ることを否定したと示す 149
- 近取者が自性として無いことに対する反論を斥ける 150
- 了義の教証と合わせる 151
- 章の名を示す 152

第10章

- プトガラ（人）が本性として有る理由を否定する 153
- 論証する例を否定する 153
- 章の著述を説く 153
- 火と薪が自性として有ることを否定する 153
- 前述していない正理によって否定する 153
- 同一本性を否定する 153
- 別本性を否定する 154
- 別本性であるという主張命題を否定する 154
- 本性として別であれば、木に相互関係しない 154
- 否定本義 154
- 木が無くして起こる 154

VIII

- 常に燃えている等となる 154
- 不定因を斥ける 155
- 本性として別であれば、木と接しなくなる 156
- 本義 156
 - それに対する不定因を斥ける 156
- 別本性であるという理由を否定する 157
- 相互関係する理由を否定する 157
 - 三時制を分析して相関を否定する 157
 - 前後時制に相関を否定する 157
 - 同時制に相関を否定する 159
 - 相関する法（現象）の有無を分析して相関を否定する 160
 - 相関・非相関の双方を否定する 160
- 現前に見られるという理由を否定する 161
- 前述した正理によって否定する 162
 - それらをまとめる 163
 - その正理を他にも適用する 164
 - 否定した意味であるとする見解を批判する 165
- 了義の教証と合わせる 166
- 章の名を示す 166

第11章

- 論証する理由を否定する 167
- 生死の行為が有る理由を否定する 167
 - 章の著述を説く 167
 - 輪廻が本性として有ることを否定する 167
 - 輪廻において、始まりと終わりとの中間の部分を否定する 167
 - 生死において、前後時と一緒に（同時）を否定する 169
 - 要約して示す 169
 - 詳細に説く 169
 - 前後時制を否定する 169
 - 生が前であることを否定する 169
 - 老死が前であることを否定する 170
 - 同時を否定する 171
 - まとめ 171
 - その正理を他にも適用する 172
 - 了義の教証と合わせる 172
 - 章の名を示す 173

第12章

- 依るものである苦しみが有る理由を否定する 174
 - 章の著述を説く 174
 - 苦しみが自性として有ることを否定する 174
 - 主張命題を挙げる 174
 - 理由を示す 174
 - 苦しみは自他各々が為したことを否定する 174
 - 苦しみを基として、自他各々が為したことを否定する 174
 - 苦しみを基として、自らが為したことを否定する 174
 - 苦しみを基として、他が為したことを否定する 175
 - プトガラを基として、各々が為したことを否定する 175
 - プトガラ自らが為したことを否定する 175
 - 他のプトガラが為したことを否定する 176
 - 自他各々が為していない他の理由を示す 178
 - 二つの集合が為したことと、無因であるという言説を否定する 178
 - その正理を他の現象にも適用する 179
 - 了義の教証と合わせる 179
 - 章の名を示す 180

第13章

- 単なる事物の本性が欠如すると示す 181
 - 事物が本性として有ることを否定する 181
 - 章の著述を説く 181
 - 他派に公認される経証によって、本性が無いことを説く 181
 - そのような解説は不合理であるという反論を斥ける 182
 - その経証の意味を他の様相として説くことを否定する 183
 - 経証の意味を他に説明する方法を示す 183
 - そのように説く理由を否定する 183
 - 他に変化するものが本性として有る理由を否定する 183
 - 本性と他に変化することの二つは矛盾することによって否定する 183
 - 他に変化することが本性として有ることはあり得ないことによって否定する 184
 - 空性が本性として有る理由を否定する 186
 - 本義 186
 - それについて、経証との矛盾を斥ける 186
 - 経典の意味を説く 186
 - それを説かれた根拠を示す 187
 - 章の名を示す 188

第14章

- 事物が本性として有ることの理由を否定する 189

会合が本性として有ることを否定する	189
章の著述を説く	189
会合が本性として成立したことを否定する	189
主張命題を挙げる	189
理由を示す	190
他が本性として無いことによって、会合を否定する	190
論式を挙げる	190
その方法を他にも当てはめる	190
理由を成立させる	191
理由を挙げる	191
それに対する論難を斥ける	191
不定因であるという論難を斥ける	191
不成因であるという論難を斥ける	193
同一と別を分析して、会合を否定する	194
それによって、会合しつつある等も否定したと示された	195
了義の教証と合わせる	195
章の名を示す	196

第15章

因縁を我所（我がもの）とすることが、本性として有ることを否定する	197
<i>(因縁を近く取ることが、本性として有ることを否定する)</i>	
章の著述を説く	197
諸事物が本性として有ることを否定する	197
本性として有ることの理由を否定する	197
本義	197
本性に因縁は必要なく、矛盾すると示す	197
自説における本性の定義を示す	199
それによって他の三極辺を否定したと示す	201
否定した意味であるという見解を叱責する	202
本性として有ることに批判を示す	203
経証による批判	203
理証による批判	204
本性として有ると言えば、辺執を超えないと示す	206
了義の教証と合わせる	208
章の名を示す	209

第16章

束縛と解脱が本性として有ることを否定する	210
本義	210
章の著述を説く	210

輪廻と涅槃が本性として成立したことを否定する	210
輪廻が本性として成立したことを否定する	210
取られものである蘊が輪廻することを否定する	210
恒常が輪廻することを否定する	210
無常が輪廻することを否定する	210
取る者である有情が輪廻することを否定する	212
蘊より別本質の有情が輪廻することを否定する	212
蘊より自とも他とも述べられないプトガラが輪廻することを否定する	212
涅槃が本性として成立したことを否定する	215
束縛と解脱が本性として成立したことを否定する	217
束縛と解脱が本性として有ることを共通に否定する	217
それぞれに否定する	218
束縛が本性として有ることを否定する	218
解脱が本性として有ることを否定する	219
涅槃の為に努めることは無意味であるという背理を斥ける	220
了義の教証と合わせる	222
章の名を示す	223

第17章

束縛と解脱が本性として有ることの理由を否定する	224
章の著述を説く	224
反論	224
善・不善の構成	224
心の善・不善の構成	224
業の分類の構成	225
要約して示す	226
詳細に説く	226
二業を三業に分類する	226
三業を七業に分類する	227
それにおいて恒常と断滅を排斥する方法	228
論難を挙げる	228
それを排斥する方法	229
継続性を承認して恒常と断滅を排斥する	229
恒常と断滅の斥け方・本義	229
例を挙げる	229
意味を当てる	230
十業道を果と共に把握する	231
不失法を承認して恒常と断滅を排斥する	232
他部の返答を排斥する	232

自部の返答をする	233
要約して示す	233
詳細に説く	234
界の分類と本性	234
如何なる所断か	234
生じ方	235
滅し方	236
意味を要約して恒常と断滅を斥ける	237
返答	237
業に本性が無いので、恒常と断滅は無い	237
業が本性として有ることを否定する	238
本性として有ることに批判を挙げる	238
恒常であり非所作である背理	238
背理本義	238
それを主張することに批判を述べる	239
論書と矛盾する	239
世間での公認と矛盾する	239
異熟を無限に引き起こす背理	240
本性として有る理由を否定する	240
業が本性として有る理由を否定する	240
業と煩惱の二つともが本性として有る理由を否定する	241
業が本性として有る他の理由を否定する	241
無本性が行為を為すことを例によって示す	243
了義の教証と合わせる	245
章の名を示す	245

第18章

無我の真如へ入る方法	246
章の著述を説く	246
真如へ入る方法	246
真如の見解を決定する	246
我が自性として成立したことを否定する	246
解脱を欲する者が最初に分析する仕方	246
それから無我の見解を決定する仕方	246
我と蘊が同一本性であることを否定する	246
我と蘊が別本性であることを否定する	248
それによって我所が自性として成立したことも否定したと示す	249
それが修されることで過失が退く次第	250
過失が退く次第	250

有身見の退き方	250
それへの反論を斥ける	251
取が尽きることによる生の尽き方	252
解脱を得る方法	252
それにおいて、経証との矛盾を排斥する	254
経証との矛盾を排斥する・本義	254
真如を如何様にも述べるができない理由	258
真如へ導く次第	261
真如の性相	263
聖者方の真如の性相	263
世間人の真如の性相	265
その意味は必ず論証されなければならないと示す	266
了義の教証と合わせる	268
章の名を示す	270

第19章

時の本性が欠如すると示す	271
時が自性として成立したことを否定する	271
章の著述を説く	271
三時が本性として有ることを総体として否定する	271
過去に相對した・相對していない二時制が本性として成立したことを否定する	271
過去に相對した時が本性として成立したことを否定する	271
相對していない時が本性として成立したことを否定する	272
その正理を他の二時制に適用する	272
他の三つ一組である法（現象）に適用する	273
自部・他部の主張をそれぞれ否定する	274
他部（非仏教徒）が主張する時を否定する	274
自部（仏教徒）實在論者が主張する時を否定する	275
了義の教証と合わせる	276
章の名を示す	276

第20章

時が本性として有る理由を否定する	277
時は果が起こる俱有縁であることを否定する	277
章の著述を説く	277
因縁の集合より生じることを否定する	277
以前の集合より生じることを否定する	277
集合より直接生じることを否定する	277
集合における有・無が生じることを否定する	277
集合において有無そのものを否定する	278

集合より間接的に生じることを否定する	281
同一時の集合より生じることを否定する	282
後時の集合より生じることを否定する	282
因そのものより生じることを否定する	283
因果は同一本質であるという説を否定する	283
因果は別本質であるという説を否定する	284
因が、果が生じる行為を準備することを否定する	284
滅した因と、留まる因が果を生じさせることを否定する	284
因は、見て・見ておらずに果を生じさせることを否定する	285
因が接して・接さずに果を生じさせることを否定する	286
果が欠如する・欠如しない因が果を生じさせることを否定する	289
空・不空である果を因が生じさせることを否定する	289
同一本性と別本性の因が果を生じさせることを否定する	290
自性として有る・自性として無い果を因が生じさせることを否定する	291
因そのものが本性として有ることを否定する	292
因縁の集合より生じることを否定する他の正理を示す	292
了義の教証と合わせる	294
章の名を示す	295

第21章

時は果が生起し失壊する因であることを否定する	296
章の著述を説く	296
生壊が本性として成立したことを否定する	296
起壊が本性として有るという主張命題を否定する	296
起壊は一緒であるかないかを考察して否定する	296
主張命題を挙げる	296
理由を示す	296
失壊は生起と一緒である・一緒でないことを否定する	296
生起は壊失と一緒である・一緒でないことを否定する	299
それらの意味をまとめる	300
起壊は如何なる拠所に有るかを考察して否定する	300
尽・無尽である拠所において起壊を否定する	300
事物である拠所において起壊を否定する	301
空・不空である拠所において起壊を否定する	302
起壊は同一か別かを考察して否定する	303
起壊が本性として有る理由を否定する	303
「見える」は理由にならない	303
その理由を示す	304
起壊は自らと同種・異種より生じることを否定する	304

- 事物は自と他より生じることを否定する 305
- 生壊が本性として成立したと主張すれば、恒常と断滅の過失であると示す 306
- 事物が本性として有ると承認すれば、恒常と断滅になるさま 306
- そのように承認しながらもその過失を斥ける返答を、否定する 306
- 本性として成立したことを承認して恒常と断滅を斥ける論法 306
- それを否定する返答 307
- 継続を承認しようとも恒常と断滅は斥けられない 307
- 継続そのものが本性として成立していないと示す 308
- そのように否定した意味を要約する 310
- 了義の教証と合わせる 311
- 章の名を示す 311

第22章

- 有（輪廻）の継続は本性が欠如すると示す 312
- 如来が本性として有ることを否定する 312
- 章の著述を説く 312
- 如来が自らの性相（定義）として成立したことを否定する 312
- 取得者が本性として成立したことを否定する 312
- 如来が実質として有ることを否定する 312
- 蘊に依拠して名付けられたものが本性として有ることを否定する 314
- 蘊に依拠して名付けられた如来が本性として有ることを否定する 314
- 蘊に依拠して名付けられたならば、本性として有るのではない 314
- その二つが矛盾しない返答を否定する 315
- 自である事物が成立していなければ、他である事物は成立していない 316
- 然れば、如来は本性として無いと成立した 316
- 如来と蘊が、取者と取られる対象として、本性として有ることを否定する 316
- それらのまとめ 317
- 取られる対象が本性として成立したことを否定する 318
- その二つのまとめ 319
- それにおいて他の邪見に関するものも礎が無いと示す 319
- 誤って捉えたことによる過失を示す 323
- その正理を他にも適用する 324
- 了義の教証と合わせる 324
- 章の名を示す 325

第23章

- 煩惱が本性として有ることを否定する 326
- 章の著述を説く 326
- 煩惱は本性があることを否定する 326
- 縁起の理由によって否定する 326

拋所は本性として無いという理由によって否定する	327
我は拋所として無いという理由によって否定する	327
心は拋所として無いという理由によって否定する	328
因は本性として無いという理由によって否定する	329
対象は本性として無いという理由によって否定する	330
因は本性として無いという他の理由によって否定する	332
貪欲と瞋恚の因が本性として成立したことを否定する	332
愚痴の因が本性として成立したことを否定する	333
誤りが本性として成立したことを否定する	333
常見が誤りとして、本性として成立したことを否定する	333
無常であると捉えることは誤りではないと、本性として成立したことを否定する	335
ただ捉えることのみが本性として成立したことを否定する	337
誤りを具えるものが本性として成立したことを否定する	338
具わるものは本性として無いので、具える者が本性として有ることを否定する	338
誤りの拋所が本性として成立したことを否定する	339
誤りが本性によって生じたことを否定する	340
誤りの対象の有無を考察して否定する	341
そのように否定することは重要であると示す	341
その理由である、それを捨て去る方法が本性として有ることを否定する	342
了義の教証と合わせる	344
章の名を示す	344

第24章

それに対する反論を斥ける	345
真実を考察する	345
章の著述を説く	345
反論	345
起壊等が不合理であるという反論	345
四聖諦の修行対象と修行行為が不合理であるという反論	345
向と果が不合理であるという反論	347
三宝が不合理であるという反論	352
業の因果等が不合理であるという反論	353
それへの返答	354
他派の言説は縁起の真如を了解していない反論であると示す	354
他派が挙げた過失は自派に当てはまらないさま	354
論難が当たらない理由	354
三義を了解していない反論であると示す	354
そのような反論が（対論者は）二諦を了解していないと示す	355

- 了解されていない二諦の本質 355
 - 根本論書に示された言葉の意味を説く 355
 - 解説を参照させた意味を確認する 357
 - 二諦を知らねば善説の真如を知らぬ 357
 - 二諦が示された必要性 357
 - 二諦を誤って捉える過失 358
 - 二諦は了解し難いので、教示者が最初に説かれていないさま 359
 - 論難が当たらないと示す本論 360
 - 過失が無いだけでなく、良質があるさま 361
 - 過失を挙げた者自身にその過失が当てはまるさま 362
 - 過失の提示者にその過失が当たる理由 362
 - それによって、自らの過失を他派の過失であると捉えた方法 362
 - それらの過失が何であるか明らかに示す 362
 - 自派の承認は、空の意味は縁起の意味であると示す 363
 - そのように主張しない者にとって一切の構成が不合理であるさま 365
 - 所知である四諦が適わない 365
 - 四諦の智等と四果が適わない 367
 - 三宝が適わない 368
 - 行為者と業果が適わない 370
 - 世間の世俗名称が適わない 371
 - 出世間の名称が適わない 372
 - 縁起の真如を見れば、四聖諦の真如を見るとなる 372
 - 章の名を示す 375
- 第 25 章**
- 涅槃を考察する 376
 - 章の著述を説く 376
 - 反論 376
 - 返答 377
 - 事物が本性として成立した説には涅槃が不合理である 377
 - 自説によって涅槃を認識する 377
 - それより他の方法で語ることを否定する 380
 - 涅槃が四つの極辺として成立したことを否定する 380
 - 涅槃が事物として有る・無いの、それぞれの極辺を主張することを否定する 380
 - 涅槃は事物の極辺であるとの主張を否定する 380
 - 無事物の極辺であるとの主張を否定する 382
 - 二極辺を捨て去った涅槃を何処におくか 384
 - 二極辺の見解を教示者が叱責する方法 385
 - その二つの極辺を主張することを否定する 385

- 双方でない極辺を主張することを否定する 387
- 涅槃を会得したものが四つの極辺として成立していないと示す 389
- それによって成立した意味 389
- 輪廻と寂滅が平等性であると成立した 389
- 無記の見解の否定が成立した 390
- そのように否定したことにおいて、経証との矛盾を排斥する 392
- 了義の教証と合わせる 393
- 章の名を示す 394

第26章

- 縁起を了解する・しないことからの、輪廻への入出の仕方 395
- 章の著述を説く 395
- 順行の縁起 395
- 放つものの因果 395
- 成すものの因果 398
- 逆行の縁起 400
- 経証と合わせる 402
- 章の名を示す 408

第27章

- 縁起生を了解すれば悪見が退くさま 409
- 章の著述を説く 409
- 十六悪見を認識する 409
- 縁起を了解することによって、それに留まらぬ方法 411
- 世俗として映像のような縁起であるとして、それらの見解に留まることを否定する 411
- 前の果てに依拠した四見解の第一を否定する 411
- 過去時に現れた・現れていないとする二見解を否定する 411
- 過去時に現れたとする見解を否定する 411
- 否定本論 411
- 否定のまとめ 414
- 過去時に現れていないとする見解を否定する 415
- まとめて、他の二見解も不合理であると示す 417
- それによって、後の果てに依拠した四見解の第一を否定したと示す 418
- 前の果てに依拠した四見解の第二を否定する 418
- 恒常・無常の辺執見の始めの二つを否定する 418
- 辺執見の後の二つを否定する 419
- 後の果てに依拠した四見解の第二を否定する 421
- 果てを具える・具えない辺執見の始めの二つを否定する 421
- 辺執見の後の二つを否定する 423
- 勝義として一切の戲論が寂滅することによって、それらの見解に留まることを否定する 425

- 了義の教証と合わせる 426
そのように教示する御恩を随念する礼拝 426
章の名を示す 427
末尾の意味 427